

災難と、キリスト教の本質

ソ・ヒョンソプ：著

伊藤仁：訳

（目次）

はじめに

第1章 「神概念」信仰から「神の本質」信仰へ

第2章 福音の本質

第3章 礼拝の本質

第4章 教会の本質

おわりに

（著者紹介）

ソ・ヒョンソプ牧師は韓国外語大学で経営学（B.A.）、延世大学院で経営学（MBA）を専攻した。1993年に福音を伝えよとの召命を受けて（第1コリント 1:17）、ソウル神学大学院に入り牧会学（M.Div.）を学んだ。2011年にアメリカのフラー神学校で「みことばの黙想を通した霊性訓練」という論文によって牧会学博士の学位（D.Min.）を受けた。

現在、GL ミッション（福音といのち宣教会）の代表である。2009年から「福音といのち」キャンプを開催して、韓国だけでなく、中国、アフリカ、中東など各国の現地牧会者に、いのちの福音を教えている。「福音といのち」「みことばの黙想とキリスト教霊性」に深い関心を持ち、福音といのちのミニストリーに集中している。新旧約聖書が証しする福音を通していのちを味わうというキリスト教の核心真理と、いのちの実際である神との交わり、みことばの黙想を伝えている。それによって初代教会の本質である永遠のいのちの共同体、すなわち三位一体の神とつながり一つとなる、三位一体的教会を建て上げることを願っている。

著書には、みことばの黙想の適用的次元を超えて、交わりの観点をあらわした「天に属するみことばの喜び」と、福音を通していのちの道に導く「福音といのち」（いずれも韓国語、イレ書院）がある。

（訳者）伊藤仁

1972年 茨城県に生まれる。

1993年 キリストを信じ受け入れる。

1994年 韓国 YWAM（Youth With A Mission）の弟子訓練学校（DTS）卒業。

1999年 聖書宣教会・聖書神学舎卒業。

2001年 本田弘慈師から牧師按手礼を受ける。

2003年 妻のソジョン宣教師と共にミャンマーで宣教活動始める。

2020年 日本に帰国。

2023年 WUPM Japan（世界未伝道部族宣教会日本支部）を立ち上げる。

現在、北海道石狩市に住み、CFNJ 聖書学院で宣教学を教える。

（家族）妻のソジョンと子ども3男2女

（WUPM Japan ホームページ）<https://wupmjapan.kyokai.jp>

（YouTube チャンネル「イトジン」）<https://www.youtube.com/@mandalay629>

はじめに

人類は歴史上多くの災難を経験して来ました。その中でも「コロナ・ウイルス感染症」は、個人はもちろん社会や国家、全世界的に初めての災難事態を呼び起こしています。教会もその例外ではありません。教会史上、経験したことのないことが起きています。信仰の先祖たちが命をかけて死守してきた主日礼拝が閉ざされて、洗礼と聖餐式も中断されました。

このコロナ禍は、教会と聖徒に大きく 2 つの質問を投げかけました。

「この伝染病をどう理解したらいいのか？」

「どう対処したらいいのか？」

色々なキリスト教団体やキリスト教の言論界、そして教団が、コロナ以後の教会の姿と信仰について連日討論を繰り広げました。

しかし一方では、コロナに対する人間の知恵と対処は、ヨブが告白した通りに「知識もなしに摂理をおおい隠す」(ヨブ 42:3) ことにもなりかねません。うかつな診断と性急な対案には警戒しなければなりません。トム・ライト (Tom Wright) は、コロナ禍を分析しそこから教訓を得て対案を提示しようとする全ての試みを拒絶しなければならないと主張します。

ただ私たちができることは、ヨブのように人間の限界を悟ってへりくだることです。盲人が象を触って言うように、人間は神がなさるみわざのほんの一面を見ているだけです。全知全能で遍在なさる神の御前に、人間は、ちりと灰に過ぎません。(ヨブ 42:6)

C.S.ルイスは「太陽の熱はバターをとかすけど、泥を固くもする」と言いました。クリスチャンにとって災難は、弱い心をとかす苦しみにもなるし、信仰をより堅くする役割を果たすこともできます。コロナ禍が信仰の非本質的要素を取り除き、本質的要素を見せてくれるなら、ある面では私たちにとって有益となります。本来崩れるべきものが、コロナ禍によって崩れるのは、神の公義であり恵みです。神はその崩れたものを、義を基礎として再び立て直して下さるからです。

(詩 94:15) こうしてさばきは再び義に戻り心の直ぐな人はみなこれに従います。

(聖書箇所引用は、基本的には新改訳 2017 を使用しています。)

第1章 「神概念」信仰から「神の本質」信仰へ

しもべは、自分の好きなように仕事をすることはできません。主人に自分がやるべきことは何かを聞かなければなりません。しもべがどんなに性格が良く、能力があり、すぐれた成果を出したとしても、主人の思い通りに働かなければ、何の役にも立ちません。ましてや「主のしもべ」は、どうでしょうか？主に聞かないで働く主のしもべは、性格が良くて多くの実を結び有名な人物になったとしても、主にとっては不法を行う者に過ぎません。信徒はもちろん牧会者も、聖書で証しする福音を正しく知らないまま働きをしたら、人間的な基準では成功したとしても、主の前では不法を行う者なのです。

（マタイ 7:21-23）わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』

韓国教会の成長を見ると、主に聞いて行うよりは、時代の必要と人間的な必要に応じて働きをした面が少なくありません。主のしもべと呼ばれる牧会者が、主人である主のことばを聞かないで自分勝手に行動しながら、自分たちだけで互いに競争してねたんで、えらそうなふりをして来たのです。

実際、韓国のプロテスタント教会は、140年という浅い歴史しかありません。2千年間の教会史の観点で見れば、一つの小さい点に過ぎません。日本植民地時代と朝鮮戦争を体験しながら、韓国教会は様々な時代状況に屈服して、信仰を捨てたこともありました。今は福音が韓国の宗教性と混合されて、聖書が証しする福音から遠のいています。

宗教学者カレン・アームストロング (Karen Armstrong) は「神の歴史」という本の中で、アブラハム以後から現代に至るまでの三大唯一神宗教（キリスト教、ユダヤ教、イスラム教）が、神についてどう認識したかを探究しました。その本では、神には人間が把握することができない「本質」があると言います。しかし人間は「本質」の表現形態である「神に対する概念」（ヒュポスタシス）を信仰したと言います。この「ヒュポスタシス」をヘブル 11:1 では（望んでいることを）「保証」と翻訳しました。この単語には、特定の対象を外部から見る外側、という意味があります。

「神の本質」は、神ご自身として、ヨハネ 1:18 では神が啓示した御子（いのち）であると説明しています。「神概念」は本質の表現形態であり、時代に意味と適切性を与える「神」として、人間が把握できる概念（ヒュポスタシス）です。

アームストロングは、三大唯一神宗教が、その時代ごとに意味と適切性を帯びた「神に対する概念」を作って、信者たちがそれを崇拝するようにした、と主張します。「神概念」が持つ意味と適切性がなくなれば、その「神」は静かに捨て去られて、それに代わる新しい神概念を作り出す、と言うのです。このように時代に有用な神概念は「人間が作った神」に過ぎません。時代が変われば神概念も変わります。

「特定の神概念が意味や適切性を失ったとき、それは静かに廃棄処分されて、新しい神概念に置き換えられた。(中略) 各時代は、自分たちに有用な神概念(イメージ)を作り出さなければならなかった。」(アームストロング「神の歴史Ⅰ」)

18世紀に入って無神論者たちは、基督教の神概念は虚構だと言いました。無神論者のホルバッハ(Holbach)は「神を作ったのは自己欺瞞の不正直な行為であり絶望の表現である」と主張しました。彼は、宗教とは人間の苦しい現実世界の中で慰めを探して、将来押し寄せるかもしれない災難を避けるために、仮想の神的存在を作って崇拝することである、と言いました。そして宗教とは、成熟した人間がえぐり出すべき無知と恐怖の芽である、とまで表現しました。

挙げ句の果てに、19世紀に入ると、無神論を超えて「神の死」思想が台頭しました。科学技術の発達には「神」から独立した人間の存在の可能性を引き立たせました。ルードヴィヒ・フォイエルバッハ、カール・マルクス、チャールズ・ダーウィン、フリードリヒ・ニーチェ、ジークムント・フロイトのような人物たちは、神のいない世界に対する学問的解釈を提起しました。その結果、19世紀末から、多くの人々が宗教の束縛から人間を解放しようとして「神の死」思想に同調するようになりました。このときから西欧基督教が急速に没落しました。

神概念信仰が消え去った場所に、2つの代案が現れました。セーレン・キエルケゴールの「神秘的実在思想」と、フリードリヒ・ニーチェの「強力な超人思想」です。キエルケゴールは、既存基督教の教理(神概念)が、言い表すことのできない神の神秘的実在(神の本質)から置き換えられて、一つの偶像になったと批判しました。そして真の基督教信仰とは、化石となって旧態依然とした信念体系(神概念)を抜け出して、不可解な神秘の神(神の本質)に全身を投げて(万物の上に)飛躍することだと説明しました。

ニーチェは、神概念信仰を廃棄したその場所(神の死)に、「神」の代わりとなる超人を置きました。彼は人間の弱さを代弁する愛と憐憫の基督教をなくすべきとして、代わりに強力な人間が出現しなければならないと強調しました。しかし皮肉にも、強力な超人誕生を主張したニーチェは、孤独な病弱者として、結局は精神異常者となって悲劇的に生涯を閉じました。注目すべき点は、彼が神は死んだと主張しながら、彼の深い所では、真の神を知りたいことを熱望していた、ということです。

神概念信仰から神の本質信仰への飛躍は「いのちのことば」を受け取るときにのみ可能となります。真理の御霊がいのちのことばを啓示するとき、私たちをいのちに至らせて、神の本質信仰へと昇華させます。

(I コリント 2:9-10) しかし、このことは、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった」と書いてあるとおりでした。それを、神は私たちに御霊によって啓示してくださいました。御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからです。

(ヨハネ 6:63) いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。

誰もみことばを離れては、神の本質信仰を持つことができません。しかしニーチェ当時の人々が真の信仰を渴望しながらもみことばに顔を背けたのは、啓蒙主義の影響で聖書の權威が地に落ちたせいでもあります。

神の本質信仰に至る前まで、人々は神概念信仰の限界状況の中で苦しみます。伝統教会で学んだ知識と教理は無意味となり、聖書を化石となった文字と見なしてしまいます。身を焦がして献身した働きは枯れていき、信者との交わりは退屈極まりないと感じます。

19 世紀中盤以後、人本主義を基にした自由主義神学が花を咲かせました。この時期に起きた 2 度の世界大戦は、人間の無力感を如実に表し、「神の死」思想は「神に対する恐れ」思想へと発展して行きました。

一群の神学者たちは、聖書が証しする真の神に対して自分なりの意見を提示しました。キエルケゴールは神概念信仰を超えて、理解することができない神秘の「神」に対して神学的洞察を試みました。カール・バルトは、神学の出発点を創造以前の世界に置いて、永遠（万物の上）と時間（万物の中）の間に「無限の質的違い」があると主張しました。このような質的違いを克服できる道は、イエス・キリストの内にあって起きた神の自己啓示にある、と言いました。パウル・ティリッヒ (Paul Tillich) は、伝統的有神論の「神」が疑いの不安の中に消えて行くときに初めて「神の上の神」(God above god) が現れると言って、無神論を克服しようとしていました。彼が言う消え去るべき有神論的な「神」とは、時代ごとに変わる有用な神概念、すなわち人間が作り出した神であると見ることができます。彼は究極的な実在である「God above god」を「真の神」として信仰することを、伝統的有神論の代案として提示しました。

韓国のキリスト教は、時代が激動するたびに、それに対応する「神概念」が、信仰を主導しました。日本植民地時代には、来世にあこがれて、イエスの再臨の緊迫性を文字的に受け取りました。1920 年代にキム・ソンド女性長老は、間違った方向で熱情的に主に仕えることによって、結局は異端の元祖となってしまいました。韓国教会は残酷な戦争とひどい貧困を体験しながら、真面目に真理を洞察するよりは、今の生活で直面している現実的問題を解

決する手段として「神概念」を熱心に崇拝しました。現世的祝福を願う御利益信仰、問題解決と応答だけに焦点を置いた祈禱院信仰、感情を楽にしてくれるカウンセリングと癒しの働き、地位の昇進、牧会の成功、教会成長を追求することなどが、まさにそれです。これは「神の本質」信仰とは全く無関係です。しかし実際に教会の中では、信仰の重要な要素として作用して来ました。

以前私は、伝統教団に属する一人の牧師が、牧会活動をしていたが無神論者になったという話を聞きました。3百人ほどの信徒がいる教会でしたが、その牧師が説教で「神はいない。今のあなたがたを見ると神はいない」と宣言して無神論者になった、とのこと。今は「Good without God」（神なしで善良に生きる）活動をしているそうです。またある一人の牧師は、教職者たちの迫害があまりにもひどくて、神に向かって叫んだのに答えがないので、牧会を辞めて無神論者になった、とのこと。

無神論者になった牧師たちが「いない」と叫んだその神は、韓国教会から消し去るべき「神概念」です。もしかしたら彼らは、人間と時代の必要に従って作り出した神概念を熱心に崇拝して宗教商売人の役割を果たしている、ある牧会者たちよりも、むしろ良心的であるかもしれませぬ。ただ自分の判断によって、その時点で信仰生活を終えてしまったのは、非常に残念なことです。

自分の良心を偽りながらする牧会は、俳優が演技する「見せかけ」と何の違いもありませぬ。自分の中に信仰がないのに信仰を宣言して、自分の中に喜びがないのに喜べと叫び、自分の中に主がないのに主を宣べ伝え、自分はみことばによって生きていないのにみことばによって生きよと叫ぶことは、俳優が演技する「見せかけ」です。ある牧師は、有名な牧師の説教を台本として演技をしたりします。これは神概念を崇拝する牧会者が演技する非現実ドラマです。

最近ポスト・コロナを備える牧会ガイドがあふれています。偶像工場である人間の心で、またもや時代に合う「神概念」を考え出しているのではないかと懸念されます。それは、一定期間は効力を発揮します。しかし時代が変わるにつれて、草花のように枯れ落ちて消え去ってしまうでしょう。

宗教改革以後、無神論と「神の死」思想は、「神の本質」ではない「神概念」の信仰を攻撃しました。真理の観点で見れば、このような神概念信仰は、私たちが当然克服すべき課題です。聖書が証しする神の本質が聖霊を通して私たちに啓示されるとき初めて、神概念信仰を克服することができます。すなわち「いのちのことば」（ヨハネ 1:1、神の本質）が啓示されるときに可能なのです。

ヨハネの福音書では、真の神は万物の上、天から来られた御子を通してご自身を啓示されます。誰も神の「本質」を見ることはできません。しかし父のふところにおられるひとり子（御子）が、ついに啓示されました。

（ヨハネ 1:18）いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神

が、神を説き明かされたのである。

この点で御子は父の歴史的啓示者です。そして父は御子に永遠のいのちを伝えるように命令されました。

(ヨハネ 12:50) わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。ですから、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのまま話しているのです。

(ヨハネ 17:2) あなたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。

(ヨハネ 17:4) わたしが行うようにと、あなたが与えてくださったわざを成し遂げて、わたしは地上であなたの栄光を現しました。

永遠のいのちは、父が御子に与えたいのちです。

(ヨハネ 5:26) それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにして下さったからです。

父は御子を通して私たちに永遠のいのちを与えます (ヨハネ 17:2)。父が御子に与え、御子をご自身を信じる者に与えた永遠のいのちこそが、神の本質です。

(ヨハネ 1:18) いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

(ヨハネ 12:50) わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。ですから、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのまま話しているのです。

イエス・キリストは天から下った人の子です。その方はモーセが荒野で蛇を上げたように地から上られました。その方が地から上られたのは、その死と復活と昇天の出来事を表します。

(ヨハネ 3:13) だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。

(3:14) モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。

(3:15) それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。

(ヨハネ 12:32-33) わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。」これは、ご自分がどのような死に方で死ぬことになるかを示して、言われたのである。

(使徒 2:33) ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。

(使徒 5:31) 神は、イスラエルを悔い改めさせ、罪の赦しを与えるために、このイエスを導き手、また救い主として、ご自分の右に上げられました。

そしてイエス・キリストの死と復活は、私たちに永遠のいのちを得させます(ヨハネ 3:15、Ⅰペテロ 1:3)。すなわち福音を通して永遠のいのちを得るのです(Ⅱテモテ 1:10)。

(Ⅰペテロ 1:3) 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。

(Ⅱテモテ 1:10) 今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされました。キリストは死を滅ぼし、福音によっていのちと不滅を明らかに示されたのです。

永遠のいのちの本質は、御子が啓示した父を知ることです。これは御子と父のうちにとどまり、父が御子に与えた栄光を見ることです。

(ヨハネ 17:3) 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。

(ヨハ 17:23) わたしは彼らのうちにいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全の一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。

(17:24) 父よ。わたしに下さったものについてお願いします。わたしがいるところに、彼らもわたしとともにいるようにしてください。わたしの栄光を、彼らが見るためです。世界の基が据えられる前からわたしを愛されたゆえに、あなたがわたしに下さった栄光を。

(ヨハネ 1:14) ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

福音を通して得た永遠のいのちは、神概念の信仰から抜け出させて神の本質の信仰へと導きます。イエス様を信じて教会に通い、さらには牧会活動をしたとしても、永遠のいのちを知らなければ、その人は「神概念」を信仰して教えることしかできません。その人は御子が啓示した父ではなく、時代に有用な「神」、人が作り出した神を崇拝しています。神に仕えると言いながら、実際には自分のために作った偶像に仕えるという、ひどいことをしでか

しているのです。クリスチャンであれば「私は神を信じる」という告白と共に「私はどんな神を信じているのか」と自分に尋ねてみるべきです。自分は聖書で御子が啓示された真の神、万物の上におられる神を信じているのか、そうでなければ、時代ごとに多くの人たちが支持する「作られた神」（神概念）を信じているのか？ 神は苦悩して尋ねる者に、真理をもって応えてくださいます。そして真理が私たちを自由にします（ヨハネ 8:32）。

神概念の信仰は、人間が把握した神に対する概念を信じているのです。クリスチャンが究極的に信じなければならない神の本質の信仰は、永遠のいのちがその本体です。すなわち神の本質は、神が自分自身を与える「いのち」を、私たちが得ることです。

（ヨハネ 20:31）これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

キリスト教信仰の本質は、永遠のいのちにあります。永遠のいのちはイエス様から来たみことばであり、そのみことばを送られた父へと導く真理です。

（ヨハネ 12:50）わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。ですから、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのまま話しているのです。

（ヨハネ 14:6）イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。

そして永遠のいのちは、イエス・キリストが父から受けた使命です。

（ヨハネ 17:2）あなたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。

永遠のいのちを得た者は、永遠のいのちを伝えることによって、イエス・キリストと同じ使命を遂行しなければなりません。

（ヨハネ 17:17）真理によって彼らを聖別してください。あなたのみことばは真理です。

（Ⅱテモテ 1:1、新共同訳）キリスト・イエスによって与えられる命の約束を宣べ伝えるために、神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから、

私たちが永遠のいのちを知るときに初めて、キリスト教信仰の要点である、福音と礼拝と教会の本質に至るのです。

第2章 福音の本質

今まで当然だと思った教会活動が、コロナによって制限を受けています。主日礼拝はもちろん、色々なプログラムと聖書の学び、集会などが閉じられています。教会の中には、永遠なものや永遠でないものが混在しています。使徒ペテロはこれを「朽ちる種」と「朽ちない種」として比べています。

(Ⅰ ペテロ 1:23 - 25) あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは永遠に立つ」とあるからです。これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。

朽ちない種は、生きた、いつまでも残る神のことばです。世々限りなく存在する主のみことば、すなわち「福音」です。朽ちる種は「福音でない全てのもの」です。福音でないものは草の花のように一時期は栄えますが、時間が経つと、しおれてなくなってしまいます。すばらしいプログラムも、豊かな賜物も、感動を与える説教も、福音でないものなら、草のようにしおれ花のように散ります。ただ福音だけが永遠なのです。

聖書では福音を2つの次元で説明しています。1つ目の次元は「神の御子イエス・キリスト」です。

(マルコ 1:1) 神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。

(ローマ 1:2 - 4) ——この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。

福音の起源は創世前の永遠から出発します。パウロは「私の福音」を指して、世々にわたって隠されていたが今や明らかにされた、神の御子であると言っています。

(ローマ 16:25-26) 私の福音、すなわち、イエス・キリストを伝える宣教によって、また、世々にわたって隠されていた奥義の啓示によって——永遠の神の命令にしたがい、預言者たちの書を通して今や明らかにされ、すべての異邦人に信仰の従順をもたらすために知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを強くすることができる方、

創世前に神の御子はロゴス（ことば）として存在しておられ、御父と共におられました。

（ヨハネ 1:1）初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

その方はいつも存在して生きておられる神のことばです。世々限りなくおられる主のみことばであり、福音です（Ⅰペテロ 1:23 - 25）。神の御子を送ると約束されたのは、その方を信じる者に永遠のいのちを与えるためです。この永遠のいのちは、偽ることのない神が永遠の昔から私たちに与えると約束してくださった恵みです。

（テトス 1:2）それは、偽ることのない神が永遠の昔から約束してくださった、永遠のいのちの望みに基づくものです。

（Ⅱテモテ 1:9）神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自分の計画と恵みによるものでした。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられ、

創造の目的は創世前に定められました。伝統的キリスト教神学が支持する創造の目的は救いです。創世前に定められた救いの内容は、私たちが御子を信じて永遠のいのちを得ることです。これはキリスト・イエスにおいて神が永遠の昔からあらかじめ定めておいた御心であり、御心の良しとするとところに従って私たちをご自分の子にすることです。このために神は私たちに御子を送ると、永遠の昔から約束してくださいました。

（テトス 1:2）それは、偽ることのない神が永遠の昔から約束してくださった、永遠のいのちの望みに基づくものです。

（エペソ 3:11）私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた、永遠のご計画によるものです。

（エペソ 1:5）神は、みこころの良しとするとところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。

（Ⅰペテロ 1:20）キリストは、世界の基が据えられる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために現れてくださいました。

初めの人アダムは神のかたち、すなわち御子のかたちの通りに造られました（Ⅰコリント 4:4、コロサイ 1:15、ヘブル 1:3、ピリピ 2:6、ローマ 8:29 参照）。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません（Ⅰヨハネ 5:12）。アダムは御子のひな型であり、その御子が来て与える永遠のいのちを受けるべき者です。

（ローマ 5:14）けれども死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じように

は罪を犯さなかった人々さえも、支配しました。アダムは来たるべき方のひな型です。

しかしアダムは御子が来られる前、すなわち永遠のいのちを得る前に罪を犯して神から離れてしまいました。それでも創世前に神が定められた約束は廃止されませんでした。神は真実であられるからです。しかし私たちに永遠のいのちを与えるために、神は大きな代価を払われました。御子を世に送り、その御子によって人間の罪を贖うため、十字架の上で死ぬようにしたのです。

福音の 2 番目の次元は、イエス・キリストのメシア的行為です。世に来られる御子は、アダムとアダムのうちにあって罪人となった全ての人の罪を身代わりに引き受けるために、死ななければなりません。神はアダムとエバが罪を犯した現場で彼らに皮の衣を作って着せて、女の子孫について告げることによって、十字架で死なれる御子を予表しました。

(創世 3:15) わたしは敵意を、おまえと女の間に、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。

(創世 3:21) 神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。

預言者たちは神の御子が世に来られると、創世記 4 章からマラキ書に至るまで預言していました。

(ローマ 1:2) ——この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、

(I ペテロ 1:10-11) この救いについては、あなたがたに対する恵みを預言した預言者たちも、熱心に尋ね求め、細かく調べました。彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証ししたときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。

福音として定義されたイエス・キリストが「メシア」であることは、普通名詞（油注がれた者）ではなく固有名詞として、彼が預言者たちの証しした「終末の救い主」であるという意味です。

キリストのメシア的行為は終末の救い主の行為です。これは 4 つの救いの出来事を指しています。I コリント 15:3-5 では、その 4 つの出来事を福音と名づけて、それぞれ独立した文章で述べています。この箇所はギリシャ語の「ホティ」(that こと)と「カイ」(and また)でつなげています。

(I コリント 15:3) 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたこと

であって、次のことです。

キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、

(15:4) また、葬られたこと、

また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、

(15:5) また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。

このように福音の内容を述べた4つの箇所は、短いけど「独立的な陳述」として宣言されています。これは福音のそれぞれの内容が互いに従属されずに、救いの出来事として独自の価値と比重を持っていることを表しています。

「死なれたこと」は死の福音（十字架の福音）、

「葬られたこと」は葬りの福音、

「よみがえられたこと」は復活の福音、

「現れたこと」は現れの福音と呼びます。

ここの5節に出る「ケファに現れ」を福音の内容に含めるかについては、神学者の間で意見が分かれます。大多数の神学者は「現れたこと」（現れの福音）を福音の内容に含めます（Martin Hengel, Joachim Jeremias など）。しかしヘリン（Hering）は、これを除外して3つの出来事が救いをもたらす福音であると主張します。ヘリンの見解に説得力があるのは、キリストの死と葬り、復活の出来事が、救いの結果として新しいいのちに歩ませるからです（ローマ 6:4）。ヘリンの見解を受け入れる場合、「現れたこと」すなわち現れの福音は、キリストが現したいのちの歩みを表します。

（ローマ 6:4）私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。

キリストのメシア的行為の福音、すなわち4つの救いの出来事は、初代教会以後の全ての教会が伝えるべき「原福音」（Original Gospel）です。これは使徒たちが共通してこの福音を信じ伝えて、パウロもコリント教会にそのまま伝えて信じるようにしたことに根拠があります。

（I コリント 15:11）とにかく、私にせよ、ほかの人たちにせよ、私たちはこのように宣べ伝えているのであり、あなたがたはこのように信じたのです。

一部の韓国教会で証しする福音は、聖書が証しする「原福音」とは多少違います。福音を

伝える団体や伝道者たちの中には「原福音」よりも、自分が強く経験した出来事について、それを支持してくれる内容が出る聖書箇所をつけ足して説教する人がいます。例えば、十字架の福音を強く経験した伝道者は自分の体験を中心として伝えますが、その根拠として十字架に関する聖書箇所を引用します。それも 4 つの救いの出来事から特定の出来事（十字架又は復活）だけを伝える傾向があります。これは福音の本質を正しく理解しておらず、そのように証した福音は、単発的な効果はあるけど、福音の目的には決して達しません。

では福音の目的とは何でしょうか？それは人間に永遠のいのちを与えることです。このいのちは、まさに神が私たちに与えると創世前に約束された御子のいのちです。福音はそれ自体が目的ではなく、永遠のいのちを得させるための道具としての真理です。すなわち福音が道具となって、永遠のいのちである究極的な真理へと私たちを導きます。使徒パウロは、神が約束された「御子によって与えられる命」（永遠のいのち）を宣べ伝えるために、自分は使徒として召されたと言いました。

（Ⅱテモテ 1:1、新共同訳）キリスト・イエスによって与えられる命の約束を宣べ伝えるために、神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから、

そしてついに御子は来られ死なれて復活されたことにより、人間に永遠のいのちを与えると約束は成就しました。つまり福音を通して（*through the gospel*）究極的な真理である「永遠のいのち」が現されるのです（*to the life*）。

（Ⅱテモテ 1:10）今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされました。キリストは死を滅ぼし、福音によっていのちと不滅を明らかに示されたのです。

パウロはまさにこの福音、すなわちいのちを得させる福音を伝えるために、自分は宣教者、使徒、また教師として任命されたと述べています。

（Ⅱテモテ 1:11）この福音のために、私は宣教者、使徒、また教師として任命されました。

「使徒」（アポストロス）とは「遣わされた者」という意味です。遣わされた者は、自分を遣わした方がさせることをしなければなりません。福音であるイエス・キリストは、私たちに永遠のいのちを与えるために十字架で死なれ復活しました。キリストから遣わされた者は、その方がされたこと、すなわちいのちを与える福音を伝えることに集中しなければなりません。永遠のいのち得た全ての人は、まさにこのことのために遣わされました。

（ヨハネ 17:17-18）真理によって彼らを聖別してください。あなたのみことばは真理です。

あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

「牧師は何を残して去るのか？」という映像を見ました。牧師は「永遠に続くいのち」を残す者です。いのちとはイエス・キリストです。牧師はそのために召されました。牧師と聖徒（キリストのからだ）は、いのちを与えるときに、その存在価値があります。その映像では、韓国教会が復興するには、いのちを与えることのほかに道はないと言い切りました。大きな教会で仕えても小さな教会で仕えても、その人がいのちを与える働きをするのなら、その人は本当に成功した牧師です。牧師はいのちを残すのです！

第3章 礼拝の本質

コロナに遭遇しながら教会で起きた一番衝撃的なことは、礼拝に関することです。韓国教会史上、信徒たちが共に集まって主日礼拝（会衆礼拝）ができなくなるのは、初めての事件です。会衆礼拝をやめてはならないという人と、当分の間オンラインで礼拝する人とは対立しています。両者の是非を決めるのは、簡単なことではありません。神の民が一つの所に集まり一つの心となって神を礼拝する会衆礼拝は、信徒間の人格的で親密な交わりを伴います。もし集まるだけで愛の交わりがなかったら、健全な礼拝をささげたとは言えません。ある信徒たちは、小さい教会の交わりの中で傷を受けて、自分のことを誰も知らない大きな教会に移って、誰とも交わりをしないで礼拝だけして帰ります。そのような信徒はもしかしたら、オンライン礼拝のほうが良いと思うかもしれません。しかし会衆礼拝が正しいかオンライン礼拝が正しいか、という問題は、礼拝の本質とは関係がありません。本質ではないことは是非の対象とはなりえません。むしろこのような論争は、聖書が言う礼拝の本質が何なのか考える機会としてとらえて、真の礼拝を回復しなければなりません。

新約聖書は旧約聖書を完成させます。旧約に出てくる全ての礼拝は、イエス・キリストが知らせた真の礼拝に帰結されます。四福音書の中でイエス様は、ヨハネ 4 章でのみ礼拝について言及しています。生ける水を求めたサマリアの女の質問に対して、イエス様が答えた箇所です。サマリアの女は、その当時の社会的な目から見たら汚れた女です。しかしヨハネの福音書の象徴性を考慮して霊的に見るならば、預言者を待っていた信仰の女性です。

（ヨハネ 4:25）女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られるとき、一切のことを私たちに知らせてくださるでしょう。

ある日サマリアの女は水を汲みにヤコブの井戸に来ます。そこでイエス様に会います。イエス様はその女に水をくださいと言います。その水は彼女がのどの渇きをいやそうとする「ヤコブの井戸」です。その井戸の水はヤコブとその子たち、そして家畜も飲んだ水でした。水質が良く水量も豊かでした。人間と家畜がこの水を一緒に飲んだということは、この水が地から出た生き物に適切な糧であることを知らせています。

（ヨハネ 4:12-13）あなたは、私たちの父ヤコブより偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を下さって、彼自身も、その子たちも家畜も、この井戸から飲みました。」イエスは答えられた。「この水を飲む人はみな、また渇きます。

サマリアの女が飲んで来たヤコブの井戸は、イエス様がくださる生ける水と対比されます。この井戸水は、生ける水を得る前まで飲む水、すなわち永遠のいのちを得る前まで肉体

の命を維持するために飲む糧です。イエス様はその女に、永遠に渴くことのない水をくださいます。

(ヨハネ 4:14) しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。

イエス様がくださる生ける水は、天に属する水であり、永遠のみことばです。これは湧き出る泉となり、私たちを永遠のいのちへと導きます。「湧き出る」(ギリシャ語で「ハロマイ」)という表現は「ピョンピョン飛びはねる」という意味で、新約聖書に3回出てきます(ヨハネ 4:14、使徒 3:8、使徒 14:10)。生ける水は天に属する生けるみことばであり(I ペテロ 1:23、25)、永遠のいのちを得させる福音です。

(II テモテ 1:10) 今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされました。キリストは死を滅ぼし、福音によっていのちと不滅を明らかに示されたのです。

ヤコブの井戸は、神から生み出される「何か」であり「霊的な存在」です。しかし何かの霊的な存在が究極的な対象となると、存在の根源である神と置き換えるようになり、それが一つの偶像となってしまいます。なので、ジョン・パイパー(John Piper)は、神がくださる存在は良いものであるが、同時に危険を含んでいると警告します。

「神ではないけど神に導く全てのもの(霊的な存在)は、価値がありながらも不安である。これらは私たちを神に導くことができるが、私たちを誘惑してそれ自身に引き付けることもできる。食べ物や結婚、教会や奇跡がこれに属することもある。これら全ての祝福は、神のラブレターをもたらす。しかし私たちが、神ご自身が福音であられることを続けて強調しなければ、人々は、その名前が罪の赦しであっても、永遠のいのちであっても、天国であっても、働きであっても、奇跡であっても、家族であっても、食べ物であっても、それは配達夫と恋に落ちることになるのである。」(パイパー「神が福音である」)

霊的な存在を象徴するヤコブの井戸は、永遠のいのちに至る前まで一時的に与えられる恵みです。従って、永遠のいのちまで導かない全ての信仰の要素は「ヤコブの井戸」と言うことができます。たとえそれが福音であっても、永遠のいのちに至るものでなければ、再び渴いてしまうヤコブの井戸になります。ヤコブの井戸は信仰の伝統や遺産、肉体的なクリスチャンに合わせた信仰プログラムなどを指します。これは肉体的な信仰生活を延命させるものです。しかし天から来る生ける水は、ピョンピョン飛びはねさせるみことばとして、永遠のいのちを与えます。

生ける水を求めたサマリアの女は、イエスが預言者だと思い、礼拝に関して質問します。

(ヨハネ 4:20) 私たちの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。

女は特定の場所を指して、まことの礼拝をどうやってささげるべきか尋ねます。「この山」とはサマリアの近くにあるゲリジム山です。イエス様は意外な答えをくださいました。

(ヨハネ 4:21) イエスは彼女に言われた。「女の人よ、わたしを信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます。

ここで礼拝の場所とは、礼拝の形式を代表する言葉です。今日の言葉で言うなら、会衆礼拝が正しいか、オンライン礼拝が正しいか尋ねたのです。「礼拝の場所」を尋ねる質問に、イエス様は「礼拝の時」が来ると答えます。そしてその時がまさに今だと言うのです。

(ヨハネ 4:23-24) しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。

「礼拝する」のギリシャ語「プロスキネオ」は、「プロス」(～に向かって)と「キネオ」(口づけする)の結合語です。宗教の領域では神に口づけすることを意味しますが、口づけるなら、ひざまずかなければなりません。なので、「プロスキネオ」は、「地にひれ伏す」「ひざまずいて拝む」を意味します。

イエス様は「父をまことに礼拝する者」が御霊と真理によって礼拝する時が来ると言われます。私たちが礼拝する対象は「天におられる父」です。従って礼拝する者は、いのちを得た神の子どもです。いのちのある者だけが父を礼拝します。いのちを知らず、得てもない者は、依然として礼拝の場所を尋ねます。父にささげるまことの礼拝は、御霊と真理によってささげる礼拝です。

そうであるなら、御霊と真理によって礼拝するとは、どういう意味でしょうか？ イエス様は「神は霊ですから」と言われました(ヨハネ 4:24)。そして「真理」はイエス・キリストご自身であると宣言されました(ヨハネ 14:6)。ギュンター・ボルンカム(Günther Bornkamm)は「神は霊ですから」という聖書箇所についてこのように解釈しています。

「神はここに現存しておられ、私たちを待っておられる。実際に単に待つだけでなく、まるで父が、帰って来た放蕩息子を迎えるために走り寄っていくように、両手を広げて私たちに向かって走って来られるのである。」

ですから御霊と真理によってささげる礼拝は、放蕩息子のような私たちを迎えてくださる父に、救い主の御子の力によって出て行く霊的实际です。礼拝とは、真理であられる御子の救いの恵みを通して父に出て行くことです。

ヨハネの福音書では、永遠のいのちを、父と御子を知ることだと説明します。

(ヨハネ 17:3) 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。

それは、御子と御父のうちにとどまることです。

(ヨハネ 17:23-24) わたしは彼らのうちにいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。父よ。わたしに下されたものについてお願いします。わたしがいるところに、彼らもわたしとともにいるようにしてください。わたしの栄光を、彼らが見るためです。世界の基が据えられる前からわたしを愛されたゆえに、あなたがわたしに下された栄光を。

そして、御子の内にあって御父と交わることです。

(I ヨハネ 1:3) 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。

この交わりは、世にあって神に喜ばれる生き方を表す、神にささげるふさわしい礼拝です。

(ローマ 12:1-2) ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。

御霊と真理が礼拝の本質です。この本質は礼拝の形式より優先します。器よりその中身がもっと大事であるのと同じです。実際、御霊と真理によってささげる礼拝は、一人でもささげることができます。日々みことばを黙想することを通して、御霊と真理の礼拝をささげることができます。このように礼拝の本質が先行するとき、器にたとえられる「会衆礼拝」の意味があります。共同体が共にささげる公同の礼拝は、イエス様が弟子たちと食事した最後

の晩餐に根拠があります。初代教会の公同礼拝は、イエス様の死と復活を記念して主日に集まりました。特に聖餐式をして主の命令を思い出すことによって、福音を伝える使命を固く決意しました。

公同礼拝は、いのちを得た者が成長するために必ず必要な儀式です。神から霊的ないのちを受けると、神の子どもとなります。その子どもたちが集まって共に礼拝して交わりを持つことは、神の家族の集まりに参加して楽しい時間を過ごすのと同じです。私たちはその囲いの中で神の愛によって育てられ、健全に成長します。天から来る永遠のいのちの祝福を受けた者が集まる所には、喜びと楽しみがあふれます。詩篇 133 篇は、神の家族の集まりである礼拝を、このように表現しています。

（詩 133:1－3）見よ。なんという幸せなんという楽しさだろう。兄弟たちが一つになってともに生きることは。それは頭に注がれた貴い油のようだ。それはひげにアロンのひげに流れて衣の端にまで流れ滴る。それはまたヘルモンからシオンの山々に降りる露のようだ。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

第4章 教会の本質

韓国でコロナは、大邱（テグ）市で行われた「新天地」という団体の集会で、本格的に拡散しました。新天地は、異端のレベルを超えた、不法を助長するカルト宗教団体です。しかし大衆は、新天地をキリスト教会の範囲の中に入れて、一般のキリスト教会まで非難しました。その後はプロテスタント教会でも感染者が大量発生して、一般教会も社会的糾弾を受けています。このような状況で、教会無用論が再び力を得ています。

コロナによって教会の集会はだんだん中断されて、多くの小さい教会が存続か閉鎖かの岐路に立たされています。中央日報という新聞に「プロテスタント教会、礼拝をしてもつぶれるし、しなくてもつぶれる、コロナ・ジレンマ」という記事が掲載されました（2020年6月20日）。この記事では、韓国にある約6万個の教会のうち80%を占める4万8千個の教会が、未自立小型教会だと書いています。コロナが続くなかで多くの小型教会が、家賃を払えなくて門を閉ざすだろうと予測しています。一方、大部分の教会がコロナ以後、教会員数が減少し、献金額が下がるだろうと見通しています。

教会無用論と教会衰退の危機の前にして、一体教会の本質は何なのか、問わずにはいられません。教会無用論に対する聖書の立場は明確です。うめき苦しむ被造物がただ一つ待ち望むことは、神の子どもたちが現れることです。

（ローマ 8:19）被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。

教会はキリストのからだです。教会がこの世に存在する目的は、うめき苦しむ万物が、キリストによって満たされるようにするためです。

（エペソ 1:22-23）また、神はすべてのものをキリストの足の下に従わせ、キリストを、すべてのもののの上に立つかしらとして教会に与えられました。教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです。

すなわち教会は、この世を救いに導くために存在します。スタンリー・ハウアーワス（Stanley Hauerwas）は、教会がこの世に必要な理由を、以下のように説明しています。

「教会がなくては、この世は自分が誰であるか知ることができないゆえに、世は教会を必要とする。この世の中で救いが成就されつつあることを世が知る方法は、教会が救われた民となり、救い主を現して見せる道だけである。この世は破壊され墮落した状態にあり、救われる必要があるという事実を世が知る方法は、教会が世を助けて、世が提供するものとは全く違うものを味わうようにさせることである。」

ボンヘッファーは「教会は世のために存在する」と言いました。救いの箱舟としての使命を強調した表現です。大衆の人気を追う教会は、時代の変化に従って消えていきます。しかし、いのちを与える教会は、決して消え去りません。強大な帝国、悪名高い全体主義政権、偉大な哲学体系も、みな崩れ去っていましたが、教会は今日まで堅く建っています。教会員数がどれだけ多いか、建物がどれだけ大きいのか、主任牧師がどれだけ有名かは、大きな問題ではありません。主をキリストと告白して信じる教会が、まさに岩の上に建てられた教会です。よみの力は、この主の教会に打ち勝てないのです。

(マタイ 16:18) そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。

しかし、目に見える外側の教会は、現れては消えたりすることがあります。初代教会の本拠地であったエルサレム教会と小アジアの教会は、跡形もなく消え去りました。ヨーロッパの教会は衰退しているし、一時期キリスト教会が勃興したアフリカは、イスラム教の手に渡ってしまいました。このように、目に見える教会は永遠ではありません。真の教会、キリストをかしらとする「その教会」(the church) だけが永遠なのです。

新約聖書では、教会の本質は「集まり」だと説明します。教会のギリシャ語「エクレシア」は「集まり」という意味です。パウロは教会を「聖徒として召された方々」と表現しています。

(I コリント 1:2) コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たちの主です。

エクレシアは「エク」(～から)と「クレオ」(呼ぶ)の結合語です。すなわち教会の本質は「聖徒たちの集まり」です。新約聖書では「エクレシア」を、単数形と複数形の、両方とも使います(使徒 8:1、9:31)。ケビン・ジャイルズ (Kevin Giles) は、教会(エクレシア)に単数形と複数形があるのは、教会がすなわち聖徒であり(単数)、同時に聖徒の集まり(複数)でもあるためだと言います。

初代教会は、だいたい家庭単位で構成されたいのちの共同体(集まり)でした。パウロ書簡でしばしば登場する「～の家」という表現は、家庭で集まる教会を指します(ローマ 16章参照)。一般的には15名を超えない小規模の家庭教会を言います。(ローマ帝国ではカエサル暗殺事件以後、15名以上集まる集会を禁止しました。)紀元313年コンスタンティヌス帝のキリスト教公認以後、建物の教会が建てられて、教会は次第に教皇を首長とする宗教機関の形態を持つようになりました。このため、教会が聖徒の集まりという本質は衰退して、

人間の必要に基づく宗教機関としての役割を果たすようになりました。

16 世紀の宗教改革者たちは、聖書を根拠として教会を改革しました。ルターは「万人祭司説」を唱えて教会を「聖徒たちの集まり」とであると定義しました。カル빈は「聖徒たちの集まり」であるだけでなく「神が制定した機構」又は「制度」とであると定義しました。神のみことばが先にあって、それに応答する聖徒たちが集まりを起こすことによって、制度としての教会が聖徒たちの集まりよりも優先される、という見解です。教会を機構や制度と定義すれば、自然と職務が生じます。カル빈は牧師、長老、執事という三職教理を制定して発展させました。

韓国教会は、初めに福音を伝えた長老派宣教師たちの影響で、カル빈の教会観を支持する傾向が見られます。「聖徒たちの集まり」や「いのちの交わりの共同体」という教会の本質をしばしば軽視して、制度や機構のような外形的要素を重要視します。なので「教会」が何であるかを問うと、大多数の信徒は建物や職務などをまず思い浮かべます。そして教会の価値を非本質的な要素に限定させてしまいます。建物の大きさ、教会員の数、献金額の多さによって教会のレベルを測るのです。これはイエス様が言われた教会の姿とは全く違います。カール・バルトは、このような教会を指して「無神論を助長する組織化した宗教機関である」と断言しています。初代教会が現した教会の本質とは程遠い姿です。

聖書では、二人か三人が主の名において集まっているところには、主もその中にいると宣言しました（マタイ 18:20）。教会の本質を回復しようとするなら、いのちの交わりを分かち合う共同体を作らなければなりません。聖徒一人一人がいのちを得て、父なる神とその御子のうちにとどまるとき、それが三位一体的な共同体の教会となります。

ケビン・ジャイルズは、教会の新しい展望として、三位一体的教会論を提示しています。三位一体的教会論は、創世前からある三位一体の神のつながりと一つになることを基礎とします。御父と御子と御霊は、永遠の昔から一つである霊的共同体であり、それが教会のモデルです。御父は御子のうちに、御子は御父のうちにとどまることによって、一つとなるのです。

（ヨハネ 17:22）またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。

これは教会の共同体性と、一つになることを表した内在的三位一体の存在様式です。さらに聖徒一人一人が、キリストのうちにあって神とつながることにより現される、教会の実在です。このような教会は、御父が御子のうちに、御子が御父のうちにおられるように、聖徒たちがみな一つとなって、三位一体の神のうちにとどまることにより、世に御子を証しします。

（ヨハネ 17:21）父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるよう

に、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。

聖徒たちの集まり（複数）としての教会に続いて、聖徒個人（単数）としての教会の本質を見てみましょう。教会が世に存在するということは、聖徒一人一人が世の中で生きていくことを意味します。教会として聖徒は、神がキリストを通して成された世との和解の務めにあずかります。

キム・ハクチョル教授は、神の和解の務めが「何でもない者たち」から起こされると主張します。神がご自分の御子を「何でもない者」として「何でもない者たち」に遣わして、何でもない者たちが生きて遭遇する暴力と恥を、余すところなく共に受けるようにされた、と言います。

その通りです！世で自称「義人」と言う者、富と権力と名誉を味わう者たちは、神を恨むことは別にありません。だから神が第一次的に和解を求める対象は、神を恨むしかない「何でもない者たち」です。彼らが抱いていたその恨みと絶望に対して、神は彼らと共に苦しみを受けることによって応答しました。

（マルコ 15:34）「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」

「わたしはあなたの苦しみを知り、その苦しみを共にして、その苦しみにによって死んだ。しかし今から違う世界を創り出す。さあ和解しよう。」

そして神は彼らに神と共に生きる真の救い、いのちを与えます。

神の和解の務めは、教会として存在する聖徒を通して成されます。

（Ⅱコリント 5:18－19）これらのことはすべて、神から出ています。神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のことばを私たちに委ねられました。

ハーヴィ・コックス（Harvey Cox）は、個人としての教会（エクレシア）を「動き」と定義しました。彼はギリシャ語のエクレシアに本来「動き」という意味があると洞察しています。彼によると、聖徒一人一人は世の中で「教会」として存在します。キリストのからだなる教会として、世に存在しているのです。そして神はこの聖徒たちを通して、世で躍動的に和解の務めを展開しています。聖徒は、イデオロギーや神学、政治的理由によって起こる葛藤にかかわらず、人々が互いに同等に共に生きて行けるように、人々を自由にします。隣人を、権威的で伝統的な宗教制度（見える教会）に連れて行くのではなく、聖徒自身が成熟した責任のある存在となって、彼らと共に生きて行きます。そうするときに、世は神の和

解の務めを受け入れて、宗教機関としての教会ではなく、個人としての教会に来ることになるでしょう。

トム・ライトは、コロナ・パンデミック（感染拡大）を体験しているこの状況で「個人としての教会」の使命を目覚めさせなければならないと主張します。コロナのゆえに世はうめいています。うめく世を見て聖徒たちもうめいています。

（ローマ 8:22）私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。

どんな診断や対案も出せずに、何をどう祈ったらよいか分からないまま、うめいています。御霊は弱い私たちを助けて、私たちの代わりに、祈るべきことを神にとりなしてくださいませ。

（ローマ 8:26-27）同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださるからです。

私たちがうめきながら、何と言うべきか、どう行動するべきか分からない、まさにその時、聖霊なる神は父なる神と共にうめいておられます。神は、神を愛する人たちと共に働いて、全てのことを益としてくださいます。

（ローマ 8:28、新改訳第3版）神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

ローマ 8:28 は、聖徒が危機や災難に遭うとき愛唱する聖句です。私たちはこの箇所を「信者に起こる全てのことは、結局は益となるのだ」というように解釈します。しかし、このように「全てのこと」を主語の場所に置くと、「どんなことでも結局はうまくいく」（気にしなくてもいいよ。全てのことは共に働いて益となるから！）という、ストア学派の主張に同意するのと同じになってしまいます。これでは、うめく世に対する適切な行動にはなりえません。

ローマ 8:28 は、その前の 27 節とつなげて解釈すべきです。この箇所の主語は「全てのこと」ではなくて「人間の心を探る方」です。もし「全てのこと」が主語ならば、「全てのこと」に一種の内的エネルギーがあって自動的に作動する、という言葉になります。28 節の

「働かせる」(スン〜エルグ)は「共に働く」という意味です。すなわち、神が主語となって、神が愛する人々と共に働かれる、ということです。神はうめく世の中で、神が愛する人々と「共に働かれて」(スネルゲオー) 益としてくださるのです。

従ってローマ 8:28 は、以下のように解釈するのが適切です。

「神は、神を愛する人々と共に働かれて、全てのことを益としてくださる。」

最近の多くの学者は、この解釈を支持しています (H.G.Jacob, S.C.Keesmaat, B.J.Walsh など)。このような解釈が、英語の聖書 (NIV) の 2 番目の欄外注にも出てきます。

“that in all things God works together with those who love him to bring about what is good with those who.”

神は、うめく世のために御子を世に遣わしました。ご自分が造られた世を愛されて、御子を送って救いの道を開かれました。救われた私たちは、神の愛を受けて、神を愛する神の子どもたちです。神を愛する人々、私たちは、うめく万物の中にあって、万物と共にうめいて、神と共に働く者たちです。神は、世で教会として建てられた私たちを通して、万物を満たします。これが教会に対する主の御心です。

(エペソ 4:10) この降られた方ご自身は、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方でもあります。

うめく世で神と共に働く者、教会は、苦しみを受けます。しかし、その苦しみは決して無駄にはなりません。キリストと共に受ける苦しみであり、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りない苦しみです (ローマ 8:18)。この苦しみは、神が私たちを御子のかたちへと造り変える「益」を生み出します。

(ローマ 8:29) 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。

神と共に働いて苦しみを受ける私たちが特に覚えるべきことは、このことです。世にあって教会として受ける苦しみが、たとい私たちを死へ引き連れて行こうとも、私たちは決して敗北しないということです。万物の中にあるどんなものも、キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできないからです。キリスト・イエスにあって現わされた神の愛 (ヘセド) は、永遠です！

(ローマ 8:35-39) だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛して下さった方によって、私たちは圧倒的な勝

利者です。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

おわりに

コロナが世と教会を変革しています。歴史を治める方である神は、今も世にあって働いておられます。神は全知全能であり、遍在なされ、万物を新しくされます。究極的に神の働きは、新しい天と新しい地に向かって進んでいます。神の御前にいる者は、死のような現実が押し寄せても生きる望みを抱いて、神の働きにあずかります。世は変わり教会の外形も変わります。私たちが追求してあこがれた新しい概念も変化して消え去ります。しかし神の本質の信仰はいつも存在します。神の本質の信仰から始まって福音の本質、礼拝の本質、教会の本質が示されます。

天から「神の本質」として世に来られたイエス・キリストは、闇と混乱の地に来て住まわれました（マタイ 4:13）。いのちそのものであられるキリストは、闇と死におおわれた地で生きて行かれました。それで、その地に住む人々は「大きな光」を見ることになりました。

（マタイ 4:16）闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が昇る。

福音を通していのちに生きる者、御霊と真理で礼拝する者、うめく世にあって教会として存在し神と共に働く者、世はそのような者たちを見て「大きな光」を見たと言うでしょう。そして神の御国がこの地に到来したことを知り、悔い改めて神に立ち返るでしょう。

（マタイ 4:17）この時からイエスは宣教を開始し、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言われた。

コロナ感染拡大で人間のわざは中断されています。しかし主のわざは決して中断されません。主のわざに自分自身をささげる者たちは、無駄でない労苦のゆえに、歴史の最後に至って、自分を召された神を賛美するでしょう。

（I コリント 15:58）ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主において無駄でないことを知っているのですから。

終末は現在であり、その日は、まさに今日です。永遠なる今なのです。